石川洋明先生追悼記念号によせて　伊藤恭彦

石川洋明教授　年譜・主要著作目録

私の障害学　石川洋明

Studies in Humanities and Cultures

No. 22

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷　22号

2014年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

DECEMBER 2014

石川洋明先生追悼記念号によせて

名古屋市立大学大学院人間文化研究科所属の石川洋明先生は、2014年６月30日にご逝去されました。

石川洋明先生は５年以上もの間、癌との厳しい闘病の日々を過ごされてきましたが、その間、絶えず研究と教育で第一線に立ち続けてこられました。ご病気が悪化され、車いすでの生活になられた後も、雨の日も寒い日も研究室に来て、研究活動を続けられると同時に教壇にも立ち続けられました。ご逝去される３日前、ご体調が必ずしもすぐれないにもかかわらず、教壇に立ち、学生たちに熱心に講義をなさいました。

重いご病気を患っておられるにもかかわらず、５年以上もの間、研究と教育を継続できたのは、石川洋明先生の並外れた強い精神力ならびに学問と学生に対する深い愛情によるものと拝察しています。強い精神力と愛情の深さから、ご病気が悪化されても、それを何度も乗り越えてこられました。私たちはそのお姿を「石川ミラクル」と呼び、心から敬意を表したものです。

本号には「私の障害学」という題の石川洋明先生のご遺稿を掲載しています。闘病の中で車いす生活になられた先生ご自身が社会学者の目で日本社会の問題点や病理を剔抉された作品です。残念ながら、本稿の初校には赤が入らないまま、先生の病室におかれていました。先生ご自身の手で加筆・修正はかないませんでした。厳密な文章を書くことを大切にされてきた先生のことですので、おそらく、もっともっと直したい箇所があったに違いありません。その意味で未完成稿ではありますが、石川洋明先生の最後の貴重な作品ですので、発表させていただくこととします。

石川洋明先生がご逝去されてから、半年がたちました。優秀な研究者であり教育者であった石川洋明先生を喪ったことは、本研究科のみならず日本の社会学界にとってとても大きな損失です。悲しみの気持ちをぬぐい去ることはできませんが、石川洋明先生の知的精神的遺産をしっかり受け継ぎ、人間文化研究科と人文社会学部の発展に尽力したいと思います。

研究科を代表し、心からご冥福をお祈りしたいと思います。

2014年12月30日

名古屋市立大学大学院人間文化研究科長　**伊　藤　恭　彦**

石川洋明教授　年譜・主要著作目録

石川洋明教授は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、人文社会学部の教授として、長年にわたり活躍され、本学の研究、教育、社会貢献に多大の貢献をされました。石川洋明教授は、2014年（平成26）６月30日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表するとともに、多年の功績に感謝をささげ、年譜と主要著作目録を掲げます。

［年譜］

1959年（昭和34）１月４日　東京都に生まれる。

1982年（昭和57）３月　東京大学教養学部教養学科卒業

1985年（昭和60）３月　東京大学大学院社会学研究科社会学（A）専攻修士課程修了

1988年（昭和63）４月　日本学術振興会特別研究員（DC）〈1990年３月まで〉

1990年（平成２）３月　東京大学大学院社会学研究科社会学（A）専攻博士課程単位取得退学

1990年（平成２）４月　名古屋市立保育短期大学講師（社会学、保育内容・社会、他担当）〈1993年３月まで〉

1992年（平成４）10月　東京都精神医学総合研究所・社会病理学研究室研究生（国内留学）〈1993年３月〉まで

1993年（平成５）４月　名古屋市立保育短期大学助教授（社会学、保育内容・人間関係、教材研究・生活、他担当）〈1997年３月まで〉

1994年（平成６）10月　Research Associate, California School of Professional Psychology-Alameda（国外留学）〈1995年４月まで〉

1996年（平成８）４月　名古屋市立大学人文社会学部助教授（社会意識論、社会病理学、社会調査実習、演習Ⅰ、演習Ⅱ、卒業論文、保育内容演習・人間関係、他担当）〈2002年３月まで〉

2000年（平成12）４月　名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授兼務（課題研究科目「ジェンダー・人権・福祉」担当）

2003年（平成15）４月　名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授（人文社会学部助教授兼務）〈2007年３月まで〉

2007年（平成19）４月　名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授（人文社会学部教授兼務）〈2014年６月30日逝去まで〉

（この間、日本赤十字愛知女子短期大学、南山大学、愛知県立女子短期大学、国立名古屋病院看護助産婦学校、愛知教育大学、金城学院大学などの非常勤講師を勤める）

［学会、社会における活動］

・　日本社会学会、数理社会学会、日本社会病理学会、日本嗜癖行動学会、日本子どもの虐待防止学会、日本子ども家庭福祉学会、ISPCAN（International Society for Prevention of Child Abuse and Neglect）などの会員。
ISPCANカリキュラムプロジェクト多職種小委員会副委員長、日本嗜癖行動学会監事などを歴任。

・ 名古屋市総務局男女平等参画室委託事業、名古屋市子ども青少年局との共同研究（研究リーダー）などを実施。
・ NAK（名古屋アディクション問題を考える会）発起人〈1991年９月～1996年４月〉。
・ CAPNA（子どもの虐待防止ネットワーク・あいち）運営委員〈1996～2000年〉。

［主要著作目録］

著書

１．『社会学の理論でとく　現代のしくみ』（共著、吉田民人篇）新曜社、1991年５月（担当は「登校拒否――誰が『病気』を『治す』のか」3-19頁）
２．『現代社会とジェンダー――女性が解放する社会』（共著）ユニテ、1995年７月（担当は「自我の社会的形成――方法論的考察」95-112頁）
３．『「異界」を生きる少年・少女』（共著、門脇厚司・宮台真司編）東洋館出版、1995年７月（担当は「子どもと家族コミュニケーションの変容――〈コミュニケーション〉に失敗した大人たちの責任とは」27-43頁）
４．『見えなかった死　虐待死データブック』（共著、子どもの虐待防止ネットワークあいち編）キャプナ出版、1998年10月（担当は「虐待死を防ぐために――CAPNA危機介入のデータから」162-166頁）
５．『家族の崩壊』（共著、四方壽雄編）ミネルヴァ書房、1999年１月（担当は「子どもの虐待」75-98頁）
６．『臨床社会学の実験』（共著、野口裕二・大村英昭編）有斐閣、2001年７月（担当は「子どもの虐待の臨床社会学――困難と課題」251-290頁）
７．『社会病理学講座　３　病める関係性――ミクロ社会学の病理』（共著、高原正興・矢島正見・森田洋司・井出裕久編）学文社、2004年２月（担当は「不登校」33-47頁）
８．『子どもの虐待防止とNGO――国際比較研究』（共著、桐野由美子編）明石書店、2005年10月（担当は第５章「アメリカ・ノースカロライナ州――地域開発型子ども虐待防止」、第８章「子ども虐待防止NGO国際比較質問紙調査」）
９．『異文化コミュニケーション事典』（共著、石井敏、久米昭元編集代表）春風社、2013年１月（担当は「家庭内暴力」）

論文

１．「自我論は何を課題とすべきか――相互行為論と自我論」『ソシオロゴス』９、1985年６月、98-109頁
２．「自意識の悪循環過程をめぐって」『ソシオロゴス』12、1988年７月、100-115頁
３．「『社会の嗜癖』論・序説」『名古屋市立保育短期大学研究紀要』31、1992年６月、1-16頁
４．「ASI（Addiction Severity Index）の我が国における適合性に関する研究」『アルコール依存とアディクション』10―4、1993年12月、共著、306-309頁
５．「保育者からみた母親の子育て意識について（Ｉ）」『名古屋市立保育短期大学研究所紀要』31、1994年６月、共著、55-63頁
６．「Ijime : An Anatomy of Bullying among Japanese Youth」『名古屋市立保育短期大学研究紀要』34、1995年６月、21-32頁
７．「子どもの問題における responsibility と empowerment」『教育学研究』64―1、1997年３月、92-95頁
８．「AC、家族内トラウマ、エンパワメント」『小児歯科臨床』2―7、1997年７月、12-17頁
９．「「保育制度改革にかかる保育者の課題意識」に関する実態調査研究」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』5、1998年、共著、223-267頁
10．「子どもの虐待防止ネットワーク・あいち（CAPNA）の活動」『現代のエスプリ383ファミリー・バイオレンス』1999年５月、151-162頁
11．「子ども虐待への介入：制度・執行・意識」『保健の科学』42―3、2000年３月、192-200頁
12．「名古屋市立大学におけるセクシュアル・ハラスメント問題の現状と課題－データ分析と対策の検討」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』10、2001年３月、67-93頁
13．「子どもへの虐待・暴力予防教育プログラムに関する効果測定研究」『子どもの虐待とネグレクト』3―1、2001年７月、190-199頁
14．「CAPNA : An NGO's Effort for Child Abuse Prevention in Japan」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』11、2001年11月、81-90頁
15．「子育て支援をめぐって」『第44回中部地区幼児教育研究会抄録集』2002年１月、57-64頁
16．「The Condition of Preventing Child Abuse and Neglect in Japan : Difficulties and Efforts」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』13、2002年11月、43-52頁
17．「アメリカにおける子ども虐待防止に関する調査研究：地域を基盤とした努力を中心に」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』17、2004年12月、91-127頁
18．「中部地方大学生における「女性への暴力」の経験と意識」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』20、2006年３月、41-56頁

19.「「男らしさ」に関する実証的研究」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』５、2006年６月、37-49頁）
20.「名古屋市青少年の自立状態と自立志向の概要」（名古屋市立大学大学院人間文化研究所『研究年報』３、2008年３月、22-25頁）
21.「Voices from Nursery－A Crack of Intervention to Child Abuse and Neglect in Japan」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』10、2008年12月、53-59頁）
22.「親密性と暴力：「虐待学」序説」『現代の社会病理』24、2009年、65-82頁
23.「“Fukushima”が問いかけること」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』16、2011年12月、133-143頁）
24.「『キャラ』論・再考、あるいはポストモダンにおける自己形成をめぐる試論」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』20、2014年２月、1-13頁）
25.「私の障害学」（名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』22、2014年11月、31-42頁）

学会発表

１.「E.Goffmanと自我論の課題」日本社会学会第58回大会、横浜市立大学、1985年10月23日
２.「ゴフマンの『枠組分析』をめぐって」日本社会学会第59回大会、山口大学、1986年11月23日
３.「相互作用における『自我』」日本社会学会第60回大会、日本大学、1987年10月３日
４.「自我論の方法に関する一考察」日本社会学会第61回大会、東北大学、1988年10月９日
５.「悪循環の人間学」日本社会学会第62回大会、早稲田大学、1989年10月22日
６.「悪循環の論理構造――自我の分析のために」日本社会学会第63回大会、京都大学、1990年11月９日
７.「嗜癖と社会」日本社会学会第64回大会、筑波大学、1991年11月３日
８.「不登校と社会――共依存の観点から」日本社会学会第66回大会、東洋大学、1993年10月11日
９.「子どもの問題と大人のresponsibility」日本教育学会第55回大会・課題検討部会〈解体する家族と子ども〉、京都大学、1996年８月30日
10.「CAPNA：An NGO’s Effort for Child Abuse Prevention in Japan」12th International Congress on Child Abuse and Neglect, Poster Session, Auckland, New Zealand、1998年９月６－９日
11.「虐待・いじめ・ハラスメント：親密圏における暴力に関する一考察」日本社会学会第72回大会、上智大学、1999年10月10日
12.「The Condition on Preventing Child Abuse and Neglect in Japan」1st Chinese Seminar on Child Abuse and Neglect, Keynote Speech、中華人民共和国、西安、1999年11月
13.「The First Child Abuse Death Statistics in Japan：NGO Compiling of Media Reports」13th International Congress on Child Abuse and Neglect, Poster Session, Durban, Republic of South Africa、2000年９月
14.「子どもの虐待・暴力防止予防教育プログラムに関する効果測定研究」日本子どもの虐待防止研究会第６回学術集会、名古屋国際会議場、2000年12月
15.「An Evaluation of Child Abuse Prevention Education Program in Japan」14th International Congress on Child Abuse and Neglect, Concurrent Session (Oral), Denver, USA、2002年７月
16.「International Comparative Studies on the Roles of Non-Governmental Organizations for Prevention of Child Abuse and Neglect」15th International Congress on Child Abuse and Neglect, Concurrent Session (Oral), Brisbane, Australia、2004年９月21日
17.「大学教職員のセクシャル・ハラスメント――中部地方公立大学における教職員調査――」日本社会学会第77回大会、熊本大学、2004年11月20日
18.「子ども虐待予防教育プログラムの効果測定研究」日本子どもの虐待防止研究会第10回学術集会、福岡際会議場、2004年12月11日
19.「子どもの虐待防止における非政府組織（NGO）の役割に関する国際比較研究」（共同、桐野由美子、石川洋明）日本子ども家庭福祉学会、関西学院大学、2005年６月５日
20.「名古屋市青少年の「自立」（1）（2）（3）（4）」（共同〈連続報告〉、藤田英史、石川洋明、安藤究、久保田健市、山田美香）日本社会学会第81回大会、東北大学、2008年11月24日
21.「The Prevalence and Prevention of Child Maltreatment in Japan：Someresults from the prevention program evaluation researches」18th International Congress on Child Abuse and Neglect, Concurrent Session (Oral), Honolulu, Hawaii, USA、2010年９月26日
22.「暴力としてのいじめ――研究のレビューと対策の検討――」日本社会学会第84回大会、関西大学、2011年９月17日
23.「親密性と暴力――メカニズムと対策に関する一考察――」日本社会病理学会第27回大会、大正大学、2011年10月２日
24.「A Campaign for a New SBS Prevention Measure in Japan and its Evaluation」19th International

Congress on Child Abuse and Neglect, Concurrent Session (Oral), Istanbul, Turkey、(by Hiroaki Ishikawa, Kota Takaoka, Noriko Matsuoka and Tomoko Funaki)、2012年９月13日

25. 「いじめのメカニズムと対策――レビューと考察――」日本教育社会学会第64回大会、同志社大学、2012年10月28日
26. 「SBS予防教育DVD“ストップ・ザ・揺さぶられ症候群”の効果――初産母親の退院指導を通して――」（共同、高岡昴太、石川洋明、松岡典子、山下さをり、瀬古里美、船木智子）、日本子どもの虐待防止学会第18回学術集会、高知、2012年12月

研究報告

１．「電話相談：集計と分析」、『子どもの虐待防止ネットワーク・あいち活動報告集１』1997年10月、6-14頁
２．『海外レポート：アメリカにおけるDV対策』名古屋市男女共同参画室、2002年３月
３．『平成14年度実施　名古屋市立大学教職員等を対象としたセクシュアル・ハラスメント調査報告（概要版）』（共著、小笠原明彦、石川洋明、野中壽子、水野美香）、名古屋市立大学セクシュアル・ハラスメント専門委員会、2003年３月
４．『平成14年度実施　名古屋市立大学教職員等を対象としたセクシュアル・ハラスメント調査報告（最終報告）』（共著、小笠原明彦、石川洋明、野中壽子、水野美香）、名古屋市立大学セクシュアル・ハラスメント専門委員会、2003年10月
５．『子どもの虐待防止における非政府組織（NGO）の役割に関する国際比較調査研究』（共著、桐野由美子、石川洋明）、平成13～15年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)、課題番号13572007）研究成果報告書、2004年３月
６．『子どもへの虐待・暴力の予防教育に関する調査研究』平成13～15年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)、課題番号13610216）研究成果報告）、2004年３月
７．『青少年の自立に関する調査報告書』（共著、石川洋明、安藤究、久保田健市）名古屋市子ども青少年局青少年自立支援室・名古屋市立大学大学院人間文化研究科共同調査報告書、2007年10月

書評

１．「書評・野口裕二著『アルコホリズムの社会学』（日本評論社）」『アルコール依存とアディクション』53（14―1）、1997年３月128-131頁
２．「書評・上野加代子著『児童虐待の社会学』（世界思想社）」『社会学評論』192、1999年３月
３．「書評：安川悦子著『フェミニズムの社会思想史』（明石書店）」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』12、2002年３月、311-315頁
４．「書評・清水新二編著『共依存とアディクション』（培風館）」『社会学評論』215（54―3）、2003年12月、306-308頁

フィールドノート他

１．「〈ともに過ごす場、ともに歩む人〉仲間の家」『アルコール依存とアディクション』38（10―2）、1993年６月、86-89頁
２．「〈学会印象記〉ダブリン・International Congress on Child Abuse and Neglectに参加して」『アルコール依存とアディクション』52（13―4）、1996年12月、355-357頁
３．「座談会・臨床社会学の可能性」『アルコール依存とアディクション』80（20―4）、（共著、野口裕二、中村正、石川洋明）、2003年12月、397-411頁
４．「「共生シンポ」斜め読み」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』18、2005年３月、159-166頁
５．「第16回ISPCAN国際会議に参加して」『JaSPCANニュースレター』21、2006年11月、5-6頁

新聞記事

１．「虐待に声出せぬ子供たち」『朝日新聞』（愛知三河版）学芸面、1996年９月７日

翻訳

１．ロジャー・ウォリス、クリステル・マルム『小さな人々の大きな音楽』（共訳、岩村沢也、保坂幸正、大西貢司、石川洋明、由谷裕哉翻訳）現代企画社、1996年１月

（作成：名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授　吉田一彦）